「植村直己冒険賞」授賞式・記念講演会を開催

誰も見たことのない未踏の地の景色を紹介したい

9月30日、日高文化体育館で第21回となる2016「植村直己冒険賞」授賞式・記念講演会を開催しました。

今回は、アルパインクライマーで、山岳カメラマンの平出和也さんに「冒険賞」を、「はんしん自立の家」甲山登山隊（宝塚市）の皆さんに「特別賞」を授与しました。

式典終了後、平出さんが「未知への挑戦」と題して、未踏峰・未踏ルートへの挑戦を熱く語りました。

《問合せ》植村直己冒険館☎44－1515

▲賞贈呈後の記念撮影（左から平出さん、はんしん自立の家石田施設長・安田さん、中貝市長）

「冒険賞」受賞者の平出和也さんは、世界に残されている魅力的な未踏峰や未踏ルートを探し出し、そこで冒険的な登山を実践してきました。また「誰も見たことのない未踏の地の景色を多くの人に紹介したい」との思いから、写真や動画を記録することにもこだわってきました。

選考委員の山極壽一さんは、平出さんの冒険と撮影との両立を「これまでの冒険賞受賞者にない特徴を持った冒険だ」と称えました。中貝市長は、まだ誰も見たことのない風景を見たいという平出さんの願望を「植村直己さんの冒険精神に通じる」と評価しました。

特別賞を受賞した「はんしん自立の家」は、障害のある人たちが一緒に生活し、一人の社会人として生活していくための施設です。この施設の窓から見える「甲山」の山頂に立ってみたいという入居者の希望をかなえるために施設職員の皆さん、登山家の續美代さん、そして續さんが声を掛けた大学生や専門学校生のボランティアの皆さんが力を合わせて登山という冒険に挑戦し、11年かけて、希望者全員の登頂に成功しました。

▲「冒険賞」の受賞盾を授与

山極選考委員は「登山の方法にもいろいろあると再認識させられた」と、感慨を述べました。中貝市長は「懸命に生きようとする姿と懸命に支えようとする姿に、心が熱くなった」とその冒険を称えました。

授賞式終了後は、平出さんの記念講演会を行いました。未踏ルートにこだわり続ける熱い心、そして、今年8月に、4回目のチャレンジで登頂に成功したシスパーレへの思いを熱く語りました。

授賞式・記念講演終了後は、植村直己さんの出身地区にある「国府地区コミュニティセンター」に会場を移動し「植村直己冒険賞」受賞者を囲む会が開催されました。地区の区長をはじめとする国府コミュニティの皆さんが、地元の食材を使い、心のこもった手料理で受賞者や来賓の皆さんをもてなしました。

和気あいあいとした雰囲気の中、授賞式や記念講演会では聞けなかった話や、植村直己さんの思い出話、冒険の話が飛び交う、素晴らしい2時間の祝宴でした。

▲「特別賞」の受賞盾を授与

▲府中小学校児童のオープニング

▲記念講演会

▲選考評　山極選考委員

▲受賞者を囲む会

▲満席の日高文化体育館

特別賞受賞

「はんしん自立の家」甲山登山隊の皆さん

障害者支援施設「はんしん自立の家」の皆さんの夢は、施設から見える甲山に「いつかは登ってみたい！」。

その夢をかなえたいと、2006年秋から学生ボランティアスタッフが立ち上がり、その思いが多くのスタッフに引き継がれ、歩くことができる人は一歩一歩それぞれのペースで進み、車イスの人は、４人の学生が交代で担いで登り、11年かけて、施設入居者の希望者全員が登頂するという夢がかなった。

（登頂者50人、ボランティア延べ861人）

冒険賞受賞

平出和也さん

高所、あるいはほぼ垂直な世界でも酸素や固定ロープを使用せず、他人のサポートも受けずに、最低限の道具のみを使用した登山スタイルを貫き、困難な岩や雪の壁に挑戦し続けている。

また、人間が存在するには不自然である極限的な状況の高所にもかかわらず、数kgのカメラや自作・改良した機材を担ぎ上げ、そしてカイトなどを利用するなどさまざまな手法を凝らし、極限の世界を切り取るスタイルを確立するとともに、普段見られない世界を、多くの人に紹介し続けている。